

## 近藤みゆき教授へ 追悼の意を込めて

齋 藤 博 子

近藤みゆき先生のご逝去を悼み、謹んでお悔やみ申し上げます。

初めて近藤先生の授業を受けたのは大学三年次でした。今でも印象に残っているのは初回の授業です。近藤先生ご自身が執筆された本から一部を抜粋してプリントしてきてくださり、それを授業内に要約し提出しなさいというお題でした。突然の事でしたので、焦りと緊張で上手く要約できず授業後悔しく帰路へ就いたことを今でもハッキリと覚えています。今思えば、一人一人の特徴を把握しておこうとする近藤先生なりのスタンスが、初回時から垣間見えていたのだなと改めて思います。

とても優しく時に厳しく授業をしてくださったため、卒論ゼミも近藤先生に見ていただきたいと思っていました。

一人一人を丁寧に指導してくださる先生でしたので、学校で行われたゼミ合宿でも、ゼミ生一人一時間、二時間の発表になっても細かく質問や鋭い指示をしてくださいました。私が卒業論文の題材とした『六歌仙』の在原業平は近藤先生の得意としていた歌人とのことで、業平の参考文献ならあの文献が私の卒業論文合うのではないか、今の文献で問題ないですよ、と親身になり文献をお勧めしてくださいました。

卒論ゼミの中で一番思い出深いのは、懇親会です。近藤先生から懇親会はしないのかと仰っていたのがきっかけて開催する運びとなりました。先生は参加が出来るのか、と始めから仰っていましたが、開催日はいつになるのか、決まったら報告してくださいね、とゼミがあることに気に

かけてくださいました。ゼミ生全員が参加できること、日程を報告したところ研究室へ呼び出されました。別件で用があったゼミ生伊藤有里さんと研究室に入室したのですが、先生がおもむろに鞆から何かを探り出しスツとそれを私の前へ差し出されました。私はいけないですがこれ（饅頭）で皆さんと懇親会楽しんでください、と驚きで言葉が曖昧ですが笑顔でそう言うってくださったと思います。伊藤さんと軽く嬉しい悲鳴を上げながらもお言葉に甘え、有難く頂戴することにしました。お陰さまで懇親会は盛況のうちに終えられました。無事開催できたことを後日報告しお礼をお伝えしたところ、良かったですと胸を撫でおろすようにまたニコツとされていたのが印象的でした。こうして先生との思い出を振り返ると、学校以外では先生とお会いする事はありませんでしたが、限られた時間の中でゼミ生と寄り添って頂けていたのだなと感じ、深く感謝しております。

今でも尚、和歌関連の本を本屋で見つけると先生との卒業論ゼミの事を思い出します。これからも先生から教えていただいた事、我々の心に残ってゆく事と思います。私達の卒業と共に休職され、昨年一二月に亡くなられたと聞き、言葉では表せられない気持ちで一杯です。近藤先生の最後のゼミ生として副ゼミ長を務めさせて頂けたこと、本当に

誇らしく思っております。

近藤先生との思い出のある和歌を最後に追悼の言葉といたします。在りし日の近藤先生のお姿を偲び心から御冥福をお祈りいたします。

夜ひと夜酒を飲み、物語をしけるに、十一日の月もかくれなむとしける折に、

親王酔ひて、うちに入りなむとしければ、よみはべりける

あかなくにまだきも月の隠るるか山の端逃げて入れずもあらなむ

（雑歌下・八八四・業平朝臣）

（さいとう ひろよ・平成30年度卒業生）